

P-169 肺癌における可溶性Fasリガンド(Fas L)の検討

兵庫医科大学第三内科
○外村篤志 中野孝司 戸川直樹 浅井光子 井上 康
山下博美 眞城美穂 三宅光富 二宮浩司 東野一彌

【はじめに】 Fas-Fas L相互作用により，アポトーシスの誘導が起ることが知られ，ある種の癌細胞ではFas Lの発現が確認されている．白血病(LGL)ではFas Lが腫瘍細胞に発現し，血清にはメタロプロテアーゼによって可溶化したFas Lが存在することが示されている．肺癌では，Fas Lの発現がヒト肺癌細胞株を用いた系で確認されている．今回我々は原発性肺癌における血清及び胸水の可溶性Fas Lについて検討した．

【対象と方法】 対象は原発性肺癌26例(腺癌10例，扁平上皮癌9例，小細胞癌7例)及び健常人6名である．胸水の検討は細胞診陽性の肺腺癌8例，小細胞癌4例で行った．可溶性Fas Lの測定はELISA法により行った．

【結果】 ①健常人の血清Fas L値は 18.1 ± 25.8 pg/mlであり，腺癌，扁平上皮癌，小細胞癌，のそれぞれの60.0%，33.3%，14.3%以上2SD以上の上昇が認められた．②胸水では腺癌よりも小細胞癌に高値を呈する症例があり，うち1例に著明な上昇を認めた(538.0 pg/ml)．

P-171 肺癌細胞と線維芽細胞のテロメラーゼ活性の検討

長崎大学第1外科¹，長崎大学医療技術短期大学²
○中村司朗¹，久松 貴¹，岡 忠之¹，田川 泰²
綾部公誌¹

【目的】 近年，小型肺癌，特に2 cm以下のadenocarcinomaの増殖，進展に線維芽細胞が関与するとの報告がある．今回我々は，肺癌組織における癌細胞とそれを支える線維芽細胞との関係についてadenocarcinomaとsquamous cell carcinomaでの違いを調べるためにtelomerase activityを用いて比較を行なった．

【方法】 直径20mm以下の肺切除施行28例中，adenocarcinoma 20例とsquamous cell carcinoma 8例を対象とした．腫瘍摘出検体の一部は直ちにCHAPS処理されTRAPアッセイにて癌細胞部のテロメラーゼ活性の測定を行なった．別の一部はshort term cultureを行ない，線維芽細胞のみを増殖させ同様にテロメラーゼ活性の測定を行なった．

【結果】 癌細胞部ではsquamous cell carcinoma: 8/8，adenocarcinoma: 19/20でテロメラーゼ活性がみられ，squamous cell caとadeno caで差は見られなかった．腫瘍部より増殖させた線維芽細胞ではsquamous cell carcinoma: 0/8，adenocarcinoma: 5/20とadeno ca由来の一部にのみテロメラーゼ活性が認められた．

【結語】 adeno caにのみ線維芽細胞のテロメラーゼ活性が認められたことはadeno caの増殖に線維芽細胞が関与していると思われる．

P-170 ヒト肺腺癌におけるEカドヘリン-カテニン系発現に関する免疫組織化学的検討

九州大学第一病理
○野澤 伸禎，橋本 修一，居石 克夫

【目的】 細胞接着分子であるEカドヘリンとその細胞内裏打ちタンパクである α 及び β カテニンの発現の低下が，癌の浸潤・転移に関与することが，各種の癌で報告されている．また， β カテニンは核内シグナル伝達を介した細胞増殖への関与が言われている．しかし，肺腺癌組織で，Eカドヘリン-カテニン系の増殖転移及び予後への関与について検討した免疫組織化学的報告は少ない．

【対象と方法】 肺腺癌手術症例35例(Stage I: 20例，Stage II: 4例，Stage IIIa: 4例，Stage IIIb: 3例，Stage IV: 4例，高分化17例，中分化10例，低分化8例)を用い，Eカドヘリン， α カテニン， β カテニン及び細胞増殖の指標であるMIB-1並びにp53の発現につき，無作為的に3ヶ所の腫瘍組織について免疫組織化学的に検索し，(1)分化度 (2)リンパ節転移 (3)増殖能 (4)予後との関連を統計学的に検討した．生存曲線はKaplan-Meier法を用いて作成し，両曲線間の有意差検定はlog-rank testを用いて行なった．

【結果と考察】 分化度の低下と，Eカドヘリン， α 及び β カテニン発現の減少ならびにMIB-1及びp53発現の増加との間には，統計学的有意差が認められた(全て $p < 0.01$)．以上より，肺腺癌において，これら5つの蛋白の発現は生物学的悪性度の指標となり得ることが示唆された．また，これら全ての蛋白の発現とリンパ節転移との間には有意差を認めなかった．さらに核内 β カテニンの発現とMIB-1発現との間にも相関は認めなかった．予後に関しては，生存率の低下とMIB-1発現に加え， β カテニン発現の低下との間にも有意な相関を認め($p < 0.05$)， β カテニン発現が予後の指標となる可能性が示唆された．

P-172 肺癌組織におけるテロメラーゼ活性

金沢大学第一外科

俵矢 香苗，大村 健二，村上 真也，小田 誠，
太田 安彦，渡辺 洋宇

目的；テロメアは染色体末端にあって染色体の安定性を保つ役割を果たしており，細胞分裂の度に短縮する．このテロメア配列を伸長する酵素として知られているテロメラーゼは悪性腫瘍において正常組織と比して非常に高い活性を示すことが知られている．今回肺癌組織及び正常肺組織に対し，テロメラーゼ活性を測定し，臨床病理学的因子との相関を検討した．

材料と方法；過去2年間に当科を受診し，肺切除術を施行した50例の肺癌組織，及び同一患者の正常肺組織標本を対象とした．テロメラーゼ活性は，TRAP法 (teromere repeat amplification protocol) を用いて測定した．

結果；肺癌組織においては50例37例(74%)でテロメラーゼ活性陽性であった．それに対し，正常肺組織ではいずれもテロメラーゼ活性陰性であった．テロメラーゼ活性の有無と腫瘍径，リンパ節転移，進行度，血管侵襲，リンパ管侵襲等の各種臨床病理学的因子との関連について検討し報告する